

大隈重信の西北津軽巡見

小林 和樹

（つがる市教育委員会
教育部文化財課・学芸員）

1881（明治14）年、明治天皇が東北と北海道を巡幸した。宿泊や休憩の場である「行在所」と「小

休所」の痕跡は青森県内各地に残されており、存在を知る方も多いだろう。

この巡幸に随従した人員の中に、当時参議の職にあった大隈重信がいた。大隈は道中、巡幸の一行と分かれて遠回りする形で西北津軽を訪れ、十三湖や屏風山砂丘

衛門家に宿泊している。

翌8日には藻川村の水害状況を視察後、船で岩木川を蒔田まで下る。さらに陸路で中里を経由して今泉へ至り、彼らは初めて十三湖を目にするこ

となつた。今泉から先の山道は相当な悪路であり、移動に難儀しつつも、道中で望む砂丘と湖が織りなす絶景に感嘆している。やがて相内を過ぎ、一行は再び船に乗り込む。ここで大隈は巡見の主目的となる、「水戸口」を視察したのだった。

十三湖の湖口、すなわち岩木川の河口である水戸口は、浅く狭い地形と強い海からの西風とが影響し合い、飛砂が堆積し閉塞することを繰り返していった。そこに大雨が降ると湖水は容易に逆流し、岩木川下流域に甚大な洪水被害をもたらしたのである。

近世より弘前藩による開削や切替工事が行われたものの効果は乏しく、国主導による抜本的な治水が求められていた。大隈が直接赴いてまで視察した理由には、こうした背景があり、その成果は大正時代に始まる国営岩木川改修事業として結実することとなる。

十三湖の視察を終えた一行は十三

村に宿泊し、翌9日に屏風山を南下した。砂丘の悪路を進んで車力を通過し、平滝沼を眺めつつ館岡村に到着する。大隈は当地で防風林の植林事業を視察し、松の苗栽培を見学している。幕末より延べ170万本にも及んだ屏風山植林を称賛したといひ、翌年には功労者である野呂武左衛門らに対し、農商務卿西郷従道から褒賞が贈られている。

館岡を出立した一行は木造の町で昼食を取り、岩木川左岸の街道を通つてその日のうちに弘前へ到着した。大隈は巡幸に合流し、晩には明治天皇とともにねぶたを鑑賞したようだ。かくして、彼の西北津軽巡見は無事に果たされたのであった。

ここからは余話である。大隈一行が視察に訪れて140年、先人たちのためまぬ努力により、屏風山砂丘地は日本有数のメロンの産地となった。実は、日本で初めてメロンを食べた人物は大隈重信であり、味と香りに魅了された彼は自邸の温室で栽培まで手がけていたという。

不毛の地と思われた砂丘に豊かに実るメロンを見て、彼は何を想うだろうか。屏風山が育んだ珠玉のメロン、天上の大隈侯にも是非味わっていただきたいものである。



屏風山の美林と日本海＝2020(令和2)年10月・つがる市教育委員会提供

地の視察を行っていたのである。その足取りは、彼に随行した医学者の峯源次郎による『東北従遊私録』に記録されている。

9月7日、函館から渡海し青森へ到着した大隈は、鶴ヶ坂を越えて大釈迦に至る。ここで巡幸の次の目的地である弘前へ向かわず西進し、五所川原の三上宇右